



## 2021年度 第1回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類 長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構  
水産資源研究所が取りまとめた結果 —

### 今後の見通し(2021年11月～2022年3月)のポイント

#### 海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、接岸傾向で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表面水温は、11月は「やや高め」となるが、12月以降は「平年並み～やや低め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度

「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

#### 漁況(来遊水準)

- (1) マアジ: 東シナ海は沖合域、沿岸域とも前年並み。日本海は前年並み。
- (2) マサバ: 東シナ海は沖合域、沿岸域とも前年を上回る。日本海は前年並み。
- (3) ゴマサバ: 東シナ海は沖合域で前年並み、沿岸域で前年を上回る。
- (4) マイワシ: 東シナ海は前年を下回る。日本海は前年を上回る。
- (5) ウルメイワシ: 東シナ海は前年を上回る。
- (6) カタクチイワシ: 東シナ海は前年を下回る。

※「前年」は2020年11月～2021年3月。

※東シナ海の予報対象は上記の全6種、日本海の予報対象はマアジ、マサバ、マイワシ

### 問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当: 企画調整部門(横浜) 森永

海況: 浮魚資源部(長崎) 大下、黒田

海況: 海洋環境部(長崎) 渡邊、種子田、井桁

電話: 095-860-1600(長崎)、ファックス: 095-850-7677(長崎)

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

# 予報対象海域

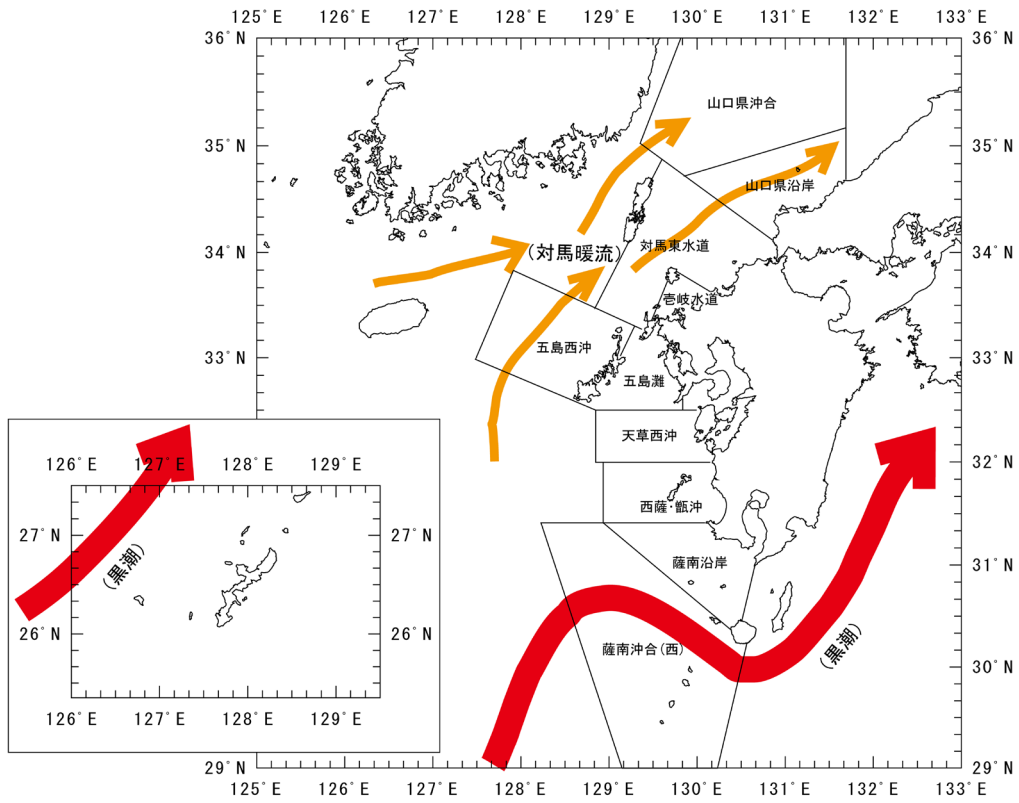


図1. 海況 (沿岸)

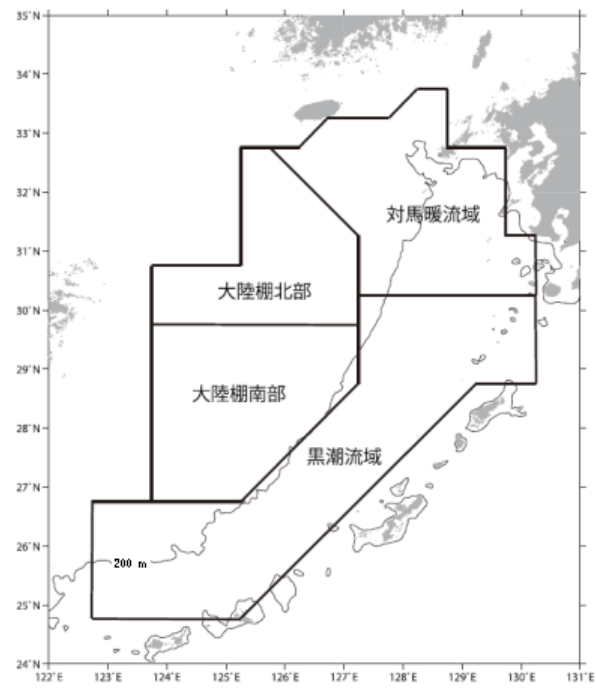


図2. 海況 (沖合)

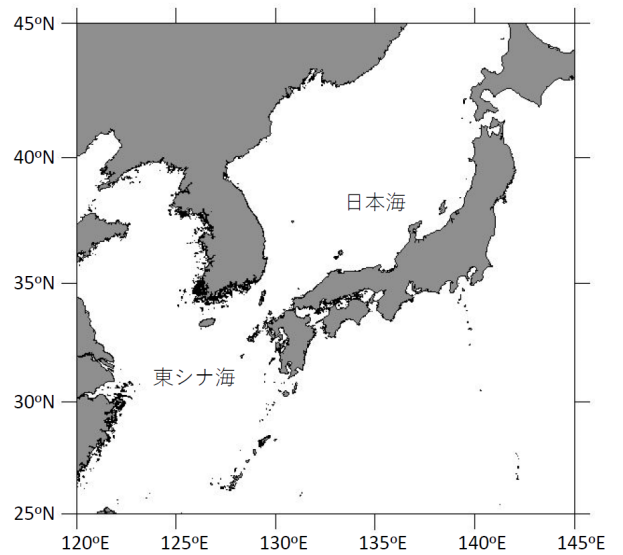


図3. 漁況。東シナ海：鹿児島県から山口県までの沿岸とその沖合を含む海域。日本海：島根県から青森県までの沿岸域（陸奥湾を含む）

# 西海ブロック海況予報

## 1. 今後の見通し（2021年11月～2022年3月）

### (1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な南北移動を繰り返すが、「接岸傾向」で経過する。

### (2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、薩南沖合、沖縄島周辺海域、大陸棚上、黒潮流域は、11月は「やや高め」となるが、12月以降は「平年並み～やや低め」で経過する。

## 2. 経過（2021年4月～10月）

### 1. 大陸棚上

#### (1) 海面水温

北部：4月「かなり高め」、5月「やや高め」、6月「かなり高め」、7月「平年並み」、8月「やや低め」、9月「やや高め」。

南部：4月「かなり高め」、5・6月「やや高め」、7月「平年並み」、8月「かなり低め」、9月「かなり高め」。

### 2. 黒潮流域

#### (1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、4月は「接岸傾向」、5月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」、6・7月は「接岸傾向」、8月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」、9月は「接岸傾向」で経過。

#### (2) 海面水温

4月「平年並み」、5・6月「やや高め」、7月「平年並み」、8月「かなり低め」、9月「かなり高め」。

### 3. 対馬暖流域・沿岸域

#### (1) 表層水温

山口県沖合：4月「はなはだ高め」、5月「かなり高め」、6月「平年並み」、7月「はなはだ高め」、8月「かなり高め」、9月「平年並み」、10月「かなり高め」。

山口県沿岸：4月「はなはだ高め」、5月「かなり高め」、6月「平年並み」、7月「かなり高め」、8月「やや高め」、9月「平年並み」、10月「かなり高め」。

対馬東水道：4月「はなはだ高め」、5月「かなり高め」、6月「やや高め」、7月「平年並み」、8月「かなり高め」、9・10月「やや高め」。

壱岐水道：4・5月「かなり高め」、6月「やや高め」、7月「平年並み」、8月「やや高め」、9・10月「かなり高め」。

五島西沖：4月「はなはだ高め」、6月「やや高め」。

五島灘：4月「やや高め」、6月「平年並み」。

天草西沖：4月「平年並み」、5月「やや高め」、6・8月「平年並み」、10月「やや高め」。

西薩・甑沖：4月「やや高め」、5・8月「平年並み」。

薩南沿岸：4月「やや高め」、5・8月「平年並み」。

薩南沖合：4月「やや高め」、5・8月「平年並み」。

沖縄島南東：4月「やや高め」、6月「平年並み」、7・8月「かなり低め」、10月「やや高め」。

沖縄島南西：4月「やや低め」、6月「平年並み」、7・8月「はなはだ低め」、10月「やや高め」。

#### (2) 表層塩分

山口県沖合：4月「かなり高め」、5・6月「やや高め」、7月「かなり低め」、8月～10月「平年並み」。

山口県沿岸：4月「かなり高め」、5月「やや高め」、6月「平年並み」、7月「やや低め」、8月「やや高め」、9・10月「平年並み」。

対馬東水道：4・5月「やや高め」、6月～8月「平年並み」、9月「やや低め」、10月「平年並み」。

壱岐水道：4月「やや高め」、5月「かなり高め」、6月「やや低め」、7月「やや高め」、8月「平年並み」、9・10月「やや低め」。

五島西沖 : 4月「平年並み」、6月「やや低め」。  
五島灘 : 4・6月「平年並み」。  
天草西沖 : 4月「やや高め」、5・6・8月「平年並み」、10月「かなり低め」。  
西薩・甑沖 : 4・5・8月「平年並み」。  
薩南沿岸 : 4月「かなり低め」、5・8月「平年並み」。  
薩南沖合 : 4・5月「やや低め」、8月「平年並み」。  
沖縄島南東 : 4月「平年並み」、6・7月「やや低め」、8・10月「平年並み」。  
沖縄島南西 : 4・6月「平年並み」、7月「かなり低め」、8・10月「平年並み」。

### 3. 現況 (2021年10月中旬)

#### 1. 大陸棚上

海面水温は北部「はなはだ高め」、南部「はなはだ高め」。

#### 2. 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸」。海面水温は「はなはだ高め」。

#### 3. 対馬暖流域

海面水温は「はなはだ高め」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の発生頻度  
「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度  
「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度  
「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

## マアジ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2021年11月～2022年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2021年級群（2021年生まれ））、1歳魚（2020年級群）、2歳魚（2019年級群）。  
魚の大きさは尾叉長で表示。

### 1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域、沿岸域とも前年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

### 2. 日本海

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：10～16cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および16～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2020年11月～2021年3月。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2021年4月～8月）および見通し（2021年11月～2022年3月）についての説明

### 1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準だったが、1980・1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年から2012年にかけてゆるやかに減少し、2012年は34万トンだった。2013年～2019年は35万～40万トンで推移し、2020年は44万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のマアジ漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであった。2005年～2017年は11万～14万トンであったが、2018年以降は10万トンを下回った。

### 2. 漁況の経過

#### (1) 東シナ海

2021年4月～8月の大中型まき網漁業のマアジの主な漁場は、東シナ海中・南部であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業の漁獲量は1万6千トンで前年（2020年4月～8月、1万5千トン）並みであった。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年並みであった（表1）。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。

#### (2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年を下回った（表2）。漁獲の主体は20～25cmの2歳魚、12～20cmの1歳魚であった。

### 3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2019年級群の豊度は2018年級群並みで、2020年級群の豊度は2019年級群並みとみられる。2021年級群の豊度の評価は難しいが、新規加入量調査などから判断すると2020年級群並みとみられる。

#### (1) 東シナ海

例年、11月～3月期には0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体で、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚の年級豊度が前年並みであることから、沖合域、沿岸域とも来遊量は前年並みと考えられる。

#### (2) 日本海

例年、11月～3月期には0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体で、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。直近の漁況から、0歳魚の来遊量は前年を下回るとみられるが、1歳魚以上の来遊量は前年並みとみられることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

## マサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2021年11月～2022年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2021年級群（2021年生まれ））、1歳魚（2020年級群）、2歳魚（2019年級群）。  
魚の大きさは尾叉長で表示。

### 1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域、沿岸域とも前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中部、五島西、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される

### 2. 日本海

(1) 来遊量：前年並み

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部～中部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）に加えて、32cm以上の2歳魚以上（中銘柄以上）が漁獲される。

注：「前年」は2020年11月～2021年3月。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2021年4月～8月）および見通し（2021年11月～2022年3月）についての説明

### 1. 資源状態

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、一時的に60万～70万トン台に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし、2000年以降、50万トン前後に留まっている。2013年には1973年以降で過去最低の38万トンとなったが、2014年以降、高い加入量に支えられ、資源量は60万トン前後まで増加した。しかし、加入が減少した2019年の資源量は45万トンと推定されている（なお、2021年度の資源評価は2021年11月に実施される予定）。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2018年は15万トンと多かったが、2019年は10万トンに減少した。

### 2. 漁況の経過

#### (1) 東シナ海

2021年4月～8月の大中型まき網漁業のマサバの主な漁場は、東シナ海中・南部と五島西であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は9千トンで前年（8千トン）並みであった。九州主要港の相場情報に基づくマサバの漁獲量は前年を上回った（前年比121%）。

鹿児島～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年を下回った（表1）。漁獲の主体は4・5月は20～40cmの1歳魚以上で、6月以降は25cm以下の0歳魚がそれに加わった。

## (2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年を下回った（表2）。漁獲の主体は4月は25cm以上の1歳魚以上で、5月以降は25cm以下の0歳魚が加わった。

## 3. 今後の見通し

資源評価結果や2019年から2021年前半にかけての不漁から判断すると、2019年級群の豊度は低く、2018年級群を下回るとみられる。同様に、2020年級群の豊度もそれほど高くないと考えられるが、2019年級群は上回るとみられる。2021年級群の評価は現段階では難しいが、8月以降の豆銘柄の好調な漁況から判断すると、2020年級群を上回る可能性がある。

### (1) 東シナ海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚の年級豊度がそれぞれ前年を上回るとみられることや直近の好調な漁況から判断して、沖合域、沿岸域とも前年を上回ると考えられる。

### (2) 日本海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）に加えて、2歳魚以上（中銘柄以上）が漁獲の対象となる。2021年4月～8月の漁況は前年より低調だったものの、0歳魚および1歳魚の年級豊度はそれぞれ前年を上回るとみられるため、11月～3月期の来遊量は前年並みと考えられる。



## ゴマサバ東シナ海系群の漁況予報

今後の見通し（2021年11月～2022年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2021年級群（2021年生まれ））、1歳魚（2020年級群）、2歳魚（2019年級群）、3歳魚（2018年級群）。魚の大きさは尾叉長で表示。

(1) 来遊量：沖合域は前年並み、沿岸域は前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中部、五島西、対馬沖、鹿児島県の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では25～30cmの0歳魚（豆銘柄）および30～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では20～35cmの0歳魚以上（豆～中銘柄）が漁獲される。

注：「前年」は2020年11月～2021年3月。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2021年4月～8月）および見通し（2021年11月～2022年3月）についての説明

### 1. 資源状態

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降、比較的安定しており、10万～20万トン程度で推移している。近年では、2015年以降増加傾向にあり、2018年の資源量は21万トンであったが、2019年は11万トンに減少した（なお、2021年度の資源評価は2021年11月に実施される予定）。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降およそ5万トン前後で推移している。近年では2011年の4万9千トンピークに減少傾向にあり、2018年にやや増加したものの、2019年は1973年以降で過去最低の2万2千トンであった。

### 2. 漁況の経過

2021年4月～8月の大中型まき網漁業のゴマサバの主な漁場は、東シナ海中部と五島灘・薩南であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は9千トンで前年（8千トン）並みであった。九州主要港の相場情報に基づくゴマサバの漁獲量は前年を下回った（前年比38%）。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年を上回った（表1）。漁獲の主体は4・5月は30～40cmの3歳魚以上で、6月以降は30cm以下の0～2歳魚が加わった。

### 3. 今後の見通し

資源評価結果やこれまでの漁況から判断すると、2019年級群の豊度は低く2018年級群を下回るが、2020年級群の豊度は2019年級群を上回るとみられる。2021年級群の評価は现阶段では難しいが、2021年9月以降の漁況は好調ではあるものの卵稚仔調査などから判断して、2020年級群並みとみられる。

例年、11月～3月期には沖合域では0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。漁獲量の大半を占める0歳魚の年級豊度が前年並みであることから、沖合域の来遊量は前年並みと考えられる。例年、沿岸域では2歳魚以上（小銘柄以上）が主に漁獲されるが、今期は直近の漁況から0歳魚も混ざるとみられる。2021年4月～8月および直近の漁況から判断して、沿岸域の来遊量は不漁であった前年を上回ると考えられる。

## マイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2021年11月～2022年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、棒受網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2021年級群（2021年生まれ））、1歳魚（2020年級群）、2歳魚（2019年級群）、3歳魚（2018年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

### 1. 東シナ海

(1) 来遊量：前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：14～17cmの0・1歳魚（小・中羽銘柄）主体に、18～22cmの2歳魚以上（中・大羽銘柄）も漁獲される。

### 2. 日本海

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期前半に日本海西部、後半に日本海西部～中部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：12～17cmの0・1歳魚（小・中羽銘柄）主体に、18～23cmの2歳魚以上（中・大羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2020年11月～2021年3月。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2021年4月～8月）および見通し（2021年11月～2022年3月）についての説明

### 1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、1980年代にかけて高い水準にあった。しかし、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。その後、2004年～2012年にかけて増加に転じ、2013年以降横ばい傾向にあったが、2019年から再び増加に転じた。

東シナ海・日本海における我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年までは100万トン以上と多かった。その後、急激に減少し、2001年～2003年の漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年から漁獲量は増加傾向となり、2011年に急激に増加して4万3千トンとなった。その後は横ばい傾向にあり、2020年は7万3千トンであった。

### 2. 漁況の経過

#### (1) 東シナ海

2021年4月～8月の鹿児島県～山口県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年を下回った（表1）。海域別に見ると、漁獲の主体となる九州南部沿岸では熊本県を除いて前年を下回ったが、九州北部沿岸では前年を上回った。漁獲の主体は15～22cmの1・2歳魚であった。

#### (2) 日本海

2021年4月～8月の島根県～青森県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年を上回った（表2）。海域別に見ると、山陰沖を中心とする日本海西部では前年を上回ったが、能登半島よりも北の日本海北部では前年を下回った。漁獲の主体は16～22cmの1～3歳魚と15cm以下の0歳魚であった。

### 3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2019年級群の豊度は2018年級群に近似し、これらは2020年級群よりも小さいとみられる。2021年級群の評価は難しいが、卵稚仔調査から判断すると2020年級群並みとみられる。

#### (1) 東シナ海

例年、11月～3月期の前半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が漁獲される。近年は漁期前半に漁獲される0歳魚の加入の多寡が漁期を通じた漁獲量に強く影響している。東シナ海の漁況を決定する要因は、年級群豊度だけでなく冬季における対馬暖流勢力も日本海から東シナ海漁場への来遊に影響すると考えられ、冬季の対馬暖流勢力が強い年には当歳魚や産卵親魚の南下回遊が妨げられて漁獲量が少なくなる傾向にある。海洋動態モデルによると、今冬（12月）の対馬暖流勢力は比較的強いことが予測されているため、東シナ海における来遊量は、比較的多かった前年を下回ると考えられる。

#### (2) 日本海

例年、11月～3月期の前半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が漁獲される。近年は漁期後半に漁獲される0～2歳（明け1～3歳）の成魚の来遊量の多寡が漁期を通じた漁獲量に強く影響している。年級群豊度を考慮すると、漁期後半における来遊量を構成する0～2歳魚（2021・2020・2019年級群）の豊度は前年同期の0～2歳魚（2020・2019・2018年級群）よりも大きいと考えられることから、日本海における来遊量は前年を上回ると考えられる。

## ウルメイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2021年11月～2022年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2021年級群（2021年生まれ））、1歳魚（2020年級群）、2歳魚（2019年級群）。  
魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2020年11月～2021年3月。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2021年4月～8月）および見通し（2021年11月～2022年3月）についての説明

### 1. 資源状態

東シナ海・日本海における資源量は1976年から1984年にかけて減少したのち、1990年代初めまで増加に転じた。1995年には資源量は10万トンを超えたが、その後再び減少し、2003年の2万5千トンとなった。2003年以降は変動しながら増加し、2015年には14万3千トンに達したが、その後、減少して2020年の資源量は4万9千トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国の漁獲量は、1976年から1998年まで毎年2万トンを超える漁獲があった。特に1980年代後半から1990年代前半までは4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半から2000年にかけて1万トンまで減少した。2001年以降は増加傾向にあり、2013年と2016年には5万トンを超える漁獲量となった。その後漁獲量は減少し、2017年以降は3万1千トン～3万9千トンの間で変動したが、2020年は2万トンと大きく減少した。

### 2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、不漁であった前年を上回った（表1）。4月～7月までの漁獲の主体は15～25cmの1・2歳魚であった。また、期間を通じて5～14cmの0歳魚が漁獲され、8月以降はそれらが主体となった。

### 3. 今後の見通し

例年、11月～3月期には0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が漁獲の主体となる。2021年4月～7月の漁況の経過や卵稚仔調査の結果から判断すると、2020年級群の豊度は2019年級群並みと考えられる。2021年級群の評価は難しいが、長崎県・熊本県における2021年8月の漁獲状況や中層トロール調査の結果から判断すると、2021年級群の豊度は2020年級群を上回ると考えられる。したがって、全体の来遊量は少なかった前年を上回ると考えられる。

## カタクチイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2021年11月～2022年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2021年級群（2021年生まれ））・1歳魚（2020年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、山口県および長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：5～10cmの0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が主体で、10cm以上の1歳魚（大羽銘柄）が混じる。

注：「前年」は2020年11月～2021年3月。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2021年4月～8月）および見通し（2021年11月～2022年3月）についての説明

### 1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1995年以降増加傾向を示して1998年には42万6千トンに達したが、2001年～2005年には19万トン前後まで減少した。資源量は2007年には30万2千トンとなったがその後減少し、2020年には12万7千トンとなった。

東シナ海・日本海における我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1997年を除いて1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2004年には6万1千トンまで減少した。その後2005年～2008年には増加したが、2009年～2013年には減少し、2014年～2015年に増加して6万1千トンを記録した。2016年以降は減少傾向にあり2020年には4万6千トンとなった。

### 2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における漁獲量は不漁であった前年並みとなった（表1）。漁獲の主体は4月には7～9cmの1歳魚で、5月～7月には7cm未満の0歳魚に移り、8月には2～5cmの0歳魚となった。

### 3. 今後の見通し

例年、11月～3月期には0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が漁獲の主体となり、1歳魚（大羽銘柄）が混じる。2021年4月～8月期の漁獲量は低い水準で経過したものの、新規加入量調査の結果などから判断すると、2021年級春季発生群の豊度は2020年と同等と考えられる。2021年級秋季発生群の豊度の評価は難しいが、直近の漁況から判断すると、前年を下回ると考えられる。全体の来遊量は前年を下回ると考えられる。

表1. 東シナ海における沿岸域の漁況経過（2021年4月～8月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
鹿児島	主要4港のまき網では、マアジ小・豆（2020～2021年級群）主体に、立目沖、串木野沖、縄瀬でまとまって漁獲された。まき網による漁獲量は1,231トンで、前年・平年を上回った（前年比552%、平年比157%）。		主要4港のまき網では、ゴマサバ中小（2016～2019年級群）主体で、湯瀬、馬毛島、宇治でまとまって漁獲された。マサバは小・豆（2019～2020年級群）主体で縄瀬、内之浦沖、立目沖周辺で若干の漁獲があった。まき網によるさば類の漁獲量は5,323トンで、前年・平年を下回った（前年比65%、平年比67%）。なお、枕崎港の中型まき網によるゴマサバの漁獲量は2,799トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比256%、平年比102%）。
熊本 牛深港	漁獲量は68トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比164%、平年比108%）。	漁獲量は517トンで、前年・平年並みであった（前年比91%、平年比106%）。	
長崎	地域により差があるが、前年を下回り、平年並みであった（前年比72%、平年比113%）。	地域により差があるが、前年・平年を上回った（前年比162%、平年比171%）。	
佐賀	漁獲量は138トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比122%、平年比106%）。	漁獲量は6トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比194%、平年比38%）。	
福岡	代表港中型まき網漁獲量は440トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比222%、平年比119%）。漁獲のうち、中・小銘柄が28%、ゼンゴ銘柄が64%であった。棒受網での漁獲はなかった。小型定置網の漁獲量は10トンで、前年・平年を上回った（前年比270%、平年比194%）。	代表港中型まき網漁獲量は470トンで、前年・平年を上回った（前年比168%、平年比224%）。漁獲のほとんどを豆銘柄が占めた。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は2トンで、前年を上回り・平年を下回った（前年比154%、平年比34%）。
山口	中型まき網漁業の漁獲量は1,057トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比183%、平年比100%）。	中型まき網漁業の漁獲量は483トンで、前年・平年を下回った（前年比65%、平年比67%）。	

注：「前年」は2020年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。鹿児島県のゴマサバの漁況経過にはマサバの記述も含む。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
鹿児島	主要4港のまき網では、小羽～中羽(2021年級群)主体に、4月に立目崎沖、5月に鷹島でまとまって漁獲された。まき網による漁獲量は30トンで、前年・平年を下回った(前年比6%、平年比4%)。北薩海域における棒受網による漁獲量は57トンで、前年・平年を下回った(前年比56%、平年比60%)。	主要4港のまき網では、中羽～大羽(2020年級群)主体に、4月～6月に甌島周辺、7月に湯瀬、竹島、野間池沖でまとまって漁獲された。まき網による漁獲量は324トンで、前年・平年を下回った(前年比43%、平年比21%)。北薩海域における棒受網による漁獲量は487トンで、前年・平年を下回った(前年比77%、平年比54%)。	主要4港のまき網では、4月～5月は中羽～大羽(2020年級群)主体に、八代海でまとまって漁獲された。まき網による漁獲量は274トンで、前年・平年を下回った(前年比37%、平年比16%)。北薩海域における棒受網による漁獲量は96トンで、前年・平年を下回った(前年比32%、平年比24%)。
熊本 牛深港	漁獲量は278トンで、前年・平年を上回った(前年比121%、平年比277%)。	漁獲量は1,110トンで、前年・平年を上回った(前年比141%、平年比179%)。	漁獲量は1,727トンで、前年・平年を下回った(前年比73%、平年比61%)。
長崎	地域により差があるが、前年・平年を下回った(前年比50%、平年比40%)。	地域により差があるが、前年・平年を上回った(前年比400%、平年比122%)。	地域により差があるが、前年並みで、平年を下回った(前年比85%、平年比46%)。
佐賀	漁獲量は約0.1トンで、漁獲がなかった前年を上回り、平年を下回った(平年比71%)。	漁獲量はわずかで、前年・平年を下回った(前年比12%、平年比15%)。	漁獲量は6トンで、前年を上回り、平年を下回った(前年比387%、平年比44%)。
福岡	代表港中型まき網漁獲量は19トンで、前年・平年を上回った(前年比3,767%、平年比260%)。棒受網の漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は27トンで、前年を上回り、平年並みであった(前年比181%、平年比107%)。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網での漁獲はなかった。棒受網漁獲量は30トンで、前年・平年並みであった(前年比92%、平年比119%)。
山口	中型まき網漁業の漁獲量は17トンで、前年・平年を上回った(前年比27,958%、平年比6,764%)。 湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲はなかった。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲量は1.5トンで、前年・平年を下回った(前年比3%、平年比7%)。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲量は小羽・中羽主体に612トンで、前年・平年を上回った(前年比199%、平年比149%)。

注：「前年」は2020年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

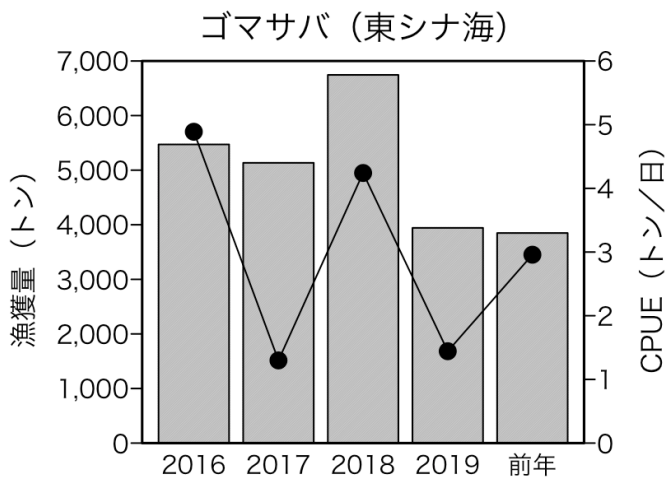
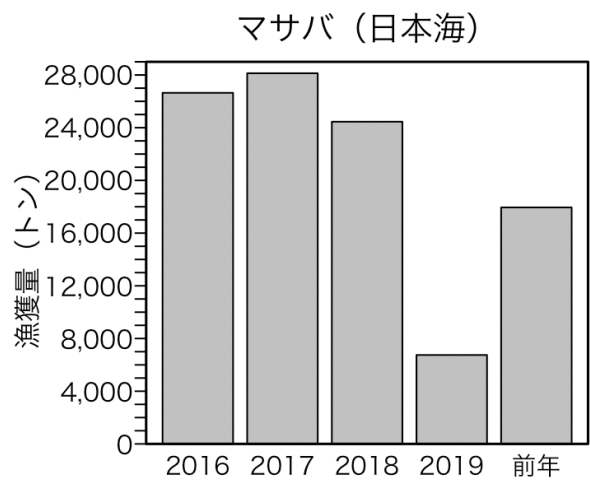
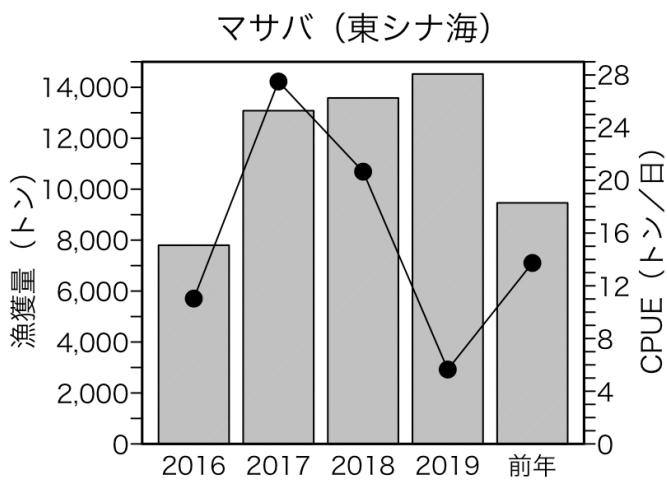
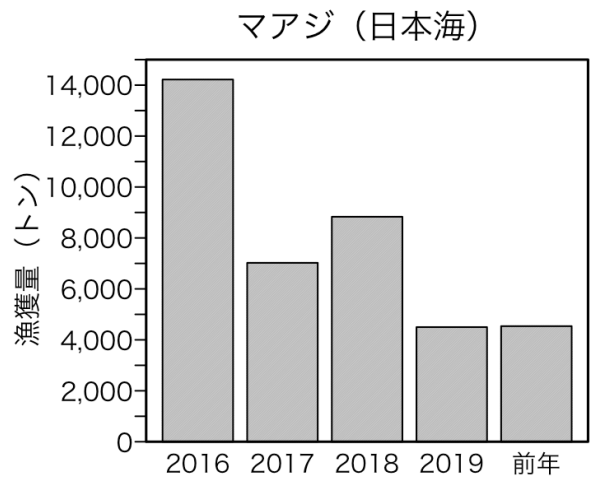
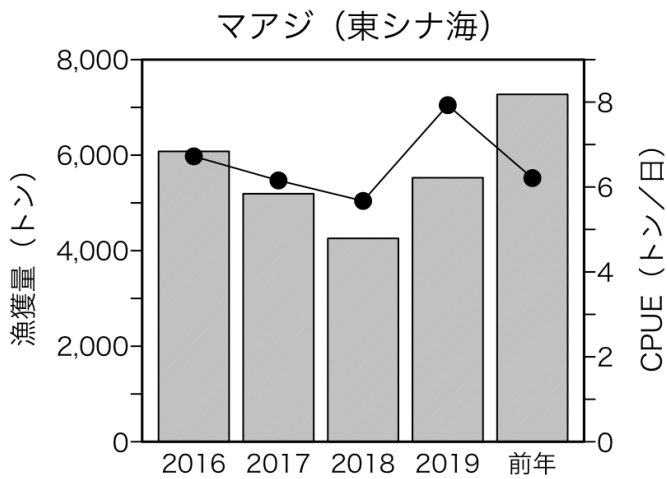
表2. 日本海における沿岸域の漁況経過（2021年4月～8月）

	マアジ	マサバ	マイワシ
島根	漁獲量は4,645トンで、前年・平年を下回った（前年比54%、平年比44%）。	漁獲量は1,372トンで、前年・平年を下回った（前年比29%、平年比30%）。	漁獲量は19,568トンで、前年・平年を上回った（前年比158%、平年比195%）。
鳥取	漁獲量は3,314トンで、前年・平年を下回った（前年比38%、平年比34%）。	漁獲量は1,012トンで、前年・平年を下回った（前年比22%、平年比18%）。	漁獲量は25,824トンで、前年・平年を上回った（前年比186%、平年比244%）。
兵庫	漁獲量は60トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比157%、平年比89%）。	漁獲量は14トンで、前年・平年を上回った（前年比356%、平年比485%）。	漁獲量は2.1トンで、前年・平年を上回った（前年比144%、平年比189%）。
京都	漁獲量は170トンで、前年・平年を下回った（前年比62%、平年比48%）。	漁獲量は138トンで、前年を下回り、平年を上回った（前年比66%、平年比143%）。	漁獲量は4.9トンで、前年・平年を下回った（前年比36%、平年比10%）。
福井	前年を上回り、平年を下回った（前年比126%、平年比79%）。	前年・平年を上回った（前年比518%、平年比402%）。	前年を上回り、平年並み（前年比130%、平年比96%）。
石川	前年並みで、平年を下回った（前年比113%、平年比65%）。	前年・平年を下回った（前年比41%、平年比52%）。	前年並みで、平年を上回った（前年比82%、平年比124%）。
富山	漁獲量は529トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比100%、平年比66%）。	漁獲量は296トンで、前年・平年並みであった（前年比112%、平年比100%）。	漁獲量は1,005トンで、前年・平年を下回った（前年比44%、平年比40%）。
新潟	前年を上回り、平年並みであった（前年比121%、平年比100%）。	前年・平年並みであった（前年比120%、平年比116%）。	前年・平年を下回った（前年比43%、平年比72%）。
山形	漁獲量は70トンで、前年・平年並みであった（前年比113%、平年比107%）。	漁獲量は5.7トンで、前年を下回り、平年を上回った（前年比35%、平年比125%）。	漁獲量は3.6トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比61%、平年比81%）。
秋田	前年・平年を上回った（前年比126%、平年比165%）。	前年・平年を下回った（前年比18%、平年比64%）。	前年を下回り、平年並みであった（前年比18%、平年比95%）。
青森	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は40トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比59%、平年比119%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は54トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比35%、平年比113%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は801トンで、前年・平年を下回った（前年比36%、平年比60%）。

注：「前年」は2020年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

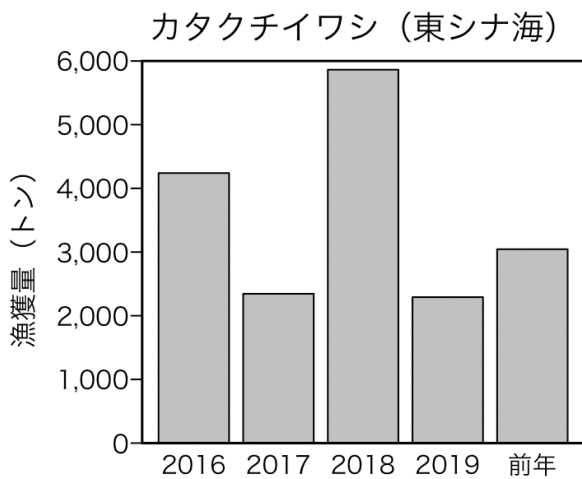
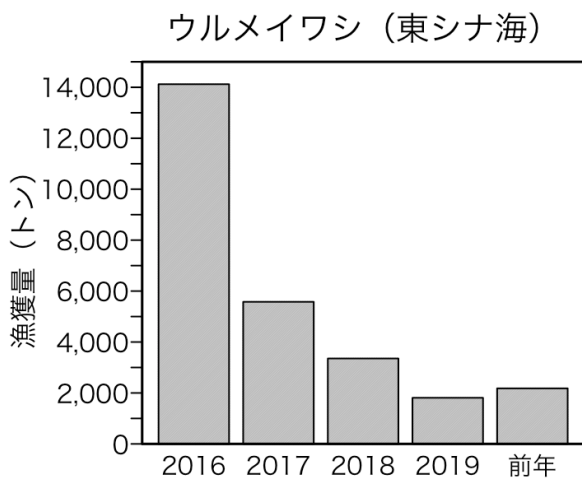
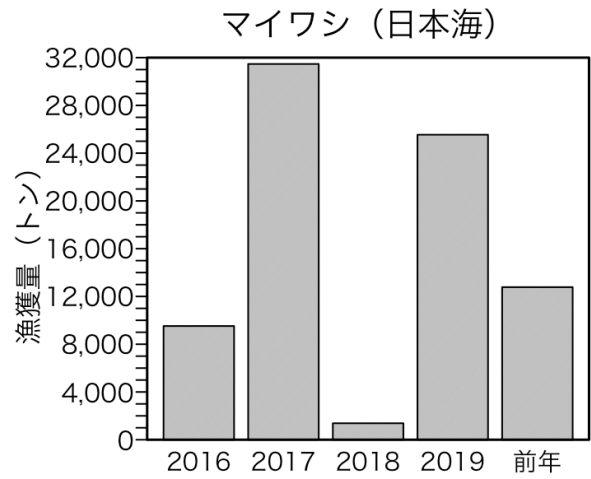
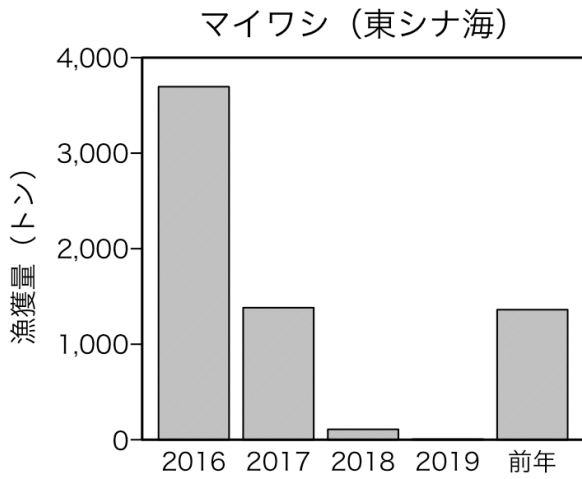
日本海において水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。





今後の見通し参考図 (マアジ、さば類)

沿岸漁業の漁獲量 (沿岸漁況の指標の一つ; 棒グラフ) と大中型まき網の1日当たりの漁獲量 (沖合漁況の指標の一つ; 折れ線グラフ、CPUE)。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、鹿児島県～山口県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県 (枕崎港・阿久根港) のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量 (ゴマサバを含むが主にマサバ) の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県 (枕崎港・阿久根港) のゴマサバ漁獲量の合計値。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。



今後の見通し参考図 (いわし類)

沿岸漁業の漁獲量。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。

## 参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	鳥取県水産試験場
秋田県水産振興センター	島根県水産技術センター
山形県水産研究所	山口県水産研究センター
新潟県水産海洋研究所	福岡県水産海洋技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	佐賀県玄海水産振興センター
石川県水産総合センター	長崎県総合水産試験場
福井県水産試験場	熊本県水産研究センター
京都府農林水産技術センター 海洋センター	鹿児島県水産技術開発センター
兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
	(取りまとめ機関)
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所